

ラブズ
Love's

好きな人がいた。

彼の優しい話し方が好きだった。

ただ、見つめていることしかできなかった人。

けれど、見つめているうちに、その人の変化に気が付いた。

とても話しやすくなって、笑顔も多くなった。

彼も、恋をしているのだと思った。だって自分がそうだったから。

こういう時の女の勘って、外れたためしがない。

そしてその勘は、やっぱり当たっていた。

可愛い人と、一緒に歩いているその人を見た。滅多に見られない満面の笑みを浮かべる彼は、この上なく素敵だった。あの笑顔を見せるのは、きっと彼女の前だけなのだろう。

私だって、あなたの前では素敵に笑える、綺麗になれる――

そう思ったって、彼の好きな人にはなれない。私では、彼と腕を組んで歩けるような関係にはなれないのだと、すぐにわかった。

どんなに好きでも、恋には諦めも必要なのだろう。でもいつか。きっと私にも、素敵な人が――絶対に。

☆ ☆ ☆

「愛は理想が高すぎるんだよ」

莊敵な雰囲気のチャペルの中、大学からの友人である青木美晴に断言される。

結婚式に出ると結婚したいなって思う、と言っただけなのに。まさか、こんなことを言われるとは思わなかった。

「そんなことない」

「あるよ。愛のお兄さんたち見てれば、わかるし」

そう言われて、愛はぐつと言葉に詰まる。

篠原愛、二十四歳になったばかり。四人兄弟の末っ子で、兄が三人いる。

「あのお兄さんたちくらいの相手じゃないと、愛はあんなドレス、着れないわ」

あんなドレス、というのは、ウエディングドレスのこと。

女としては、やっぱり懂れる。見るたびにうらやましくて、いいなあ、と思う。

久しぶりに友人の結婚式に呼ばれた。二十四歳での結婚はわりと早い方だと思っけれど、なんと

友人の結婚式はこれで四度目だ。つまり、すでに四人の友人が結婚しているということ。

つい先日、一番上の兄が結婚式を挙げたばかり。

今思い出しても素敵な式で、花嫁のウエディングドレスも綺麗だった。

「美晴、確かにうちの兄さんたちは素敵だけど、それと私の理想が高いのは違うよ？」

「よく言う！ あんたの好み、一番上の、壹哉さんでしょ？ それこそ無理。あんた一生、結婚できな」

一番上の兄は壹哉という。三十五歳の彼は、現在、外資系の会社で支社長をしている。背が高くスタイルも抜群、おまけに頭もいい。そして先日、愛が懂れている素敵な女性と結婚した。

「好みじゃなくて、理想、だつてば」

「どっちでも同じ。だから、無理つて言つてんの」

愛は唇を尖らせる。いくら友達でも酷い言いぐさではないか。

心の中で文句を言いながら、新郎と新婦を見た。

とても幸せそうな友人の旦那様は、少し小太りだけど優しそうだ。旦那様と微笑み合う友人が、失恋したばかりの愛にはうらやましかつた。

そうこうする間に式が終わり、披露宴会場に移動する。

美味しい料理を食べて、花嫁に祝いの言葉を述べた後は、久しぶりに会う友達と近況を語り合う。そして午後三時には披露宴が終わった。二次会はないため、その場で解散となる。

今月は財布がややピンチだったから、壹哉の妻の比奈に結婚式のドレスを借りた。スリムな彼

女の服が入る心配だったが、なんとか着れたので一安心。クリーニングをして返さなければ、と思いつながら美晴と連れ立って会場の外へ向かう。

「じゃあ私、先に帰るね。彼が迎えに来てははずだから。愛も早く、送り迎えしてくれる彼氏作ったら？ 私の友達の中で……っていうか、さっきの披露宴会場の中でも、愛が一番、綺麗で可愛いんだから」

「……ありがと、美晴」

手を振る美晴に手を振り返して、愛はため息をつく。

ふと視線を移すと大きな鏡が目に入る。目の前を行ったり来たりする人々の間から、自分の姿を見つめた。

比奈から借りたのは、優しいピンク色のアメリカンスリーブ型のドレスだった。腰にリボンのあるデザインで、膝下まであるミモレ丈だ。

数着見せてもらったが、一目見て可愛いと思い、速攻で決めた。

愛が一番綺麗で可愛い、と美晴は言ってくれたが、改めて鏡で自身の姿を見ると、そこまでは思えない。

それに、美晴は褒めてくれたけれど、これまで異性に告白されたこともないし、お付き合いもしたことがない。おまけに失恋したばかり。

美晴の言う通り、確かにちよつとだけ好みがうるさいかもしれないが、そういう機会は皆無だったのだ。

「だって、吾兄も、浩兄も、健兄も、健兄もそれぞれカッコイイんだもん。身近な男の人があれだったら、理想が高くなるのもしょうがないじゃん」

一番上の兄の吾哉は本当にカッコイイ。穏やかで優しく、笑顔が素敵。

二番目の兄、浩二は物静かで安心する人。もちろん顔もいい。浩二は、愛が高校生の頃に亡くなった父の跡を継いで、菓子職人になった。愛の実家は和菓子屋で秋月堂という。浩二は綺麗で繊細な美味しい和菓子を作っているのだ。

だから愛は常々、菓子において兄が作る和菓子に勝るものはないと思っている。その兄は、今は奥さんと一緒に店を守ってくれている。

そして、三番目の兄は、健三。明るくて優しく、天真爛漫という言葉が似合う人だ。前向きで頭もいい健三に、愛はよく勉強を見てもらっていた。今は一流企業の営業部に勤め、可愛い奥さんもいる。

そんな素敵で、ちよつと年の離れた兄たちに囲まれて育てば、理想が高くなるのも当たり前前だ……と、愛は思う。

『あとは、愛だけね』

吾兄の結婚が決まった時、母はそう笑って愛の頭を撫でた。

でもお母さん、と心の中で呟く。

認めたくはないけど、まだ当分はブラコンが治らないと思います、と。

後れ毛をわざと作ってアレンジした髪に触れ、愛はもう一度ため息をつく。

いつか私にも、好きだったあの人や、兄たちのように特別な誰かが現れるのだろうか……
そんなことを考えながら、一歩足を踏み出した時だった。

「すみません、失礼ですが……」

背後から呼び止められて振り返ると、綺麗な目をした男の人が愛をじっと見ている。
緑っぽい茶色のガラス玉のような瞳。

どう見ても、ハーフっぽく見える顔立ち。それこそタレントやモデルといってもおかしくないほど、綺麗で整った容姿をしている。かといって女性らしいわけではなく、男性らしい力強い雰囲気。髪の色はやや明るく、フォーマルスーツを着た姿は王子様のようなだった。

「ああ、やっぱり。篠原支社長の妹さん、ですよね？」

篠原支社長、というのは兄の壱哉のこと。ということは、兄の仕事相手かもしれないと思った。

「はい、そうです……えっと？ 兄のお仕事の……？」

「支社長の結婚式の二次会で、一度お会いしているのですが……店の名前はデュヴェンツォンといいます。覚えてますか？」

「……あ！ あの素敵なお店の！」

壱哉の結婚式の二次会は、会社の人が選んだという雰囲気の良い店で開かれた。綺麗で食事も美味しかったのを覚えている。個人的にもまた行きたい、と思ったほどだ。

この人は、確かそのオーナーだったはず、と思い出し、愛は軽く会釈する。

でも名前は覚えていなかった。それを察してか、彼は笑みを浮かべて名乗った。

「奥宮楓です。以前お会いした時も綺麗な方だと思いましたが……今日はまた一段とお綺麗なので、

声をかけるのを躊躇いました」

外国人だ、と愛は内心緩く笑ってしまった。

こうして先に容姿を褒める言い方が、外国の人そのものだ。

心の中で緩く笑うのと同じように、愛は目の前の彼に対し愛想笑いを浮かべる。自分の周りに、綺麗だから声をかけるのを躊躇った、とか口に出す人はいない。

「篠原さんも、結婚式に？」

「はい、友達の。もう終わりましたけど」

「そうですか。僕も今、終わったところです」

にこりと笑った顔は本当に王子様。ハーフって本当にいいよなあ、とついじっと見つめてしまった。

でも、兄の仕事相手でもないようだし、と愛はこの場を離れたいと思った。

こういう、コミュニケーションを積極的に取ってくる人は、なんだか苦手なのだ。

「これからお帰りですか？」

「はい」

「送りましょうか？」

王子スマイルだった。愛は彼を見て固まる。

ほぼ初対面なのにそれはないだろう、と愛はやんわり断った。

「……いえ、駅もすぐそこなので」

なんとか笑みを浮かべて言うと、彼も同じように笑って言った。

「送ります」

「……あの、あ、はい」

意外と強引。

はつきり言うその言い方に、なんだか送ってもらった方がいい気がして、了承してしまった。

強引そうには見えなかったから、愛は意外に思っただけ相手を見る。

というか、ほとんど初対面なのに、と少しだけ警戒心を抱く。

そんな愛に、笑みを浮かべた王子様はこっちはです、と言った。

連れて行かれた駐車場には、白いメルセデス。兄の吉哉が乗っている車と一緒に形だった。さすがに持っている車も高級だと思った。

助手席のドアを開け、どうぞ、と中に促される。

覚えのある座り心地の良さにほっと息を吐くと、運転席に乗り込んできた奥宮が何かを差し出ししてきた。

「篠原支社長に、これを渡してくれますか？」

見ると、小さな白い封筒がいびつな形に盛り上がっている。

受け取って中身を確認すると、ボタンが一つ入っていた。

「これ、兄のボタンですか？」

「ええ。二次会で落としたらしいと、以前連絡をもらっていたので。大切なものようで、気になつていたので……最近、店で見つかったの」

「それで、送るって？」

「ええ、そうです。僕では、篠原支社長に会う機会がなかなかなくて。すみません、ダシに使いました」

申し訳なさそうに微笑む奥宮を見て、なんだ、と思いつながら封筒にボタンをしまった。

「それに、可愛い人が一人にいるのは、昼間でも危ないですから」

その、とつてつけたような台詞に、愛は小さく息を吐き肩の力を抜いた。

にっこりと笑った愛は、奥宮を見て口を開く。

「さすがに昼間は大丈夫ですよ。送っていただけのは、駅までで結構です」

「わかりました。では、駅までお送りします。すみません、強引に車へ乗せて」

そう言いながら、奥宮はゆつくりと車を出した。

強引だった自覚はあるらしい。でも物腰が丁寧だから、なぜか嫌な気分にはならなかった。

そんなことを思いつつ、愛は口を開いた。

「あの、二次会のお店、とても良かったです。ご飯も美味しくて。確か、他にも同じようなお店を持つてらっしゃるんですよね？」

二次会で挨拶した際に、そんなことを聞いたような気がする。

「ええ。他にレストランが一つと、バーが二つですね」

「若いのにすごいですね。二次会のお店も、上品で落ち着いた雰囲気だったし……他のお店も、よさそう。でもバーって、会員制とかあるんですか？」

「バーは会員制ではないですよ。ただ、一見さんはお断りですが」

ああ、そうか。二次会をしたD u v e n tという店も、どこか大人な雰囲気で、決してカジュアルな感じじゃなかった。ちよつとかしこまって行かなければならないような、そんな店。

「奥宮さんのお店には行ってみたいけど、私にはまだちよつと早い気がします。すぐくオシャレで、素敵なお店でしたから」

「D u v e n tと、バーのカイリはそうですけど、I i l N e i g eはカジュアルな店なので、よろしければ来てください」

ちよつど信号で車が停まった時、奥宮が内ポケットから名刺入れを取り出す。中から二枚の名刺を取り出し、愛へ渡したところで信号が変わった。

「カイリって、海の里って書くんですね」

「海の傍で育ったので。バーの方はその名刺を見れば入れますので、ぜひ」

もう一枚はI i l N e i g eの名刺。

「ネージュ、ってどういう意味ですか？」

「フランス語で雪です」

そうですか、と言いながら愛が頷くと、車は駅のロータリーに入った。

「お使いだてしてすみませんが、篠原支社長に必ず渡してくださいね」

にこりと笑ったハーフの王子様顔。

日本人の愛には馴染みのない綺麗な顔立ち。眩しい感じがして、思わずパチパチと隣きをしてから、はい、と頷く。

「では、気を付けて帰ってください」

自分で車のドアを開けて降りる。ドアを閉めて運転席の奥宮に頭を下げると、すぐに車は走って行った。

その後ろ姿を見送って、愛は深いため息をつく。

「なんだか、スマートな人だった……」

見た目通りの王子様みたいな人。

あんな人は、きつと女性関係にも不自由しないんだろうな、と思いつつ預かった封筒を見る。

「まあ、私には関係ないけど」

愛は引き出物の入った紙袋を持ち直し、その中へ封筒とビーズだらけの小さなバッグを入れる。そして、駅の改札へ向かって歩き出した。

吉哉にボタンを渡すには、直接会社に行くしかないな、と考えてまたため息をつくのだった。

☆ ☆ ☆

友人の結婚式の翌日、愛は奥宮から預かったボタンを渡すため、仕事の帰りに吉哉の勤める会社

へ寄った。まだ日の出ているうちに、寄ることができて良かったと思う。

壱哉が勤める会社は、日本アースリーという、大きな外資系企業の日本支社だ。

インフォメーションに座っている女性に、妹ということ伝えて、壱哉に会いたい旨を伝えると、十分ほど待ってもらえれば時間が取れると言われた。

そうして待つこと十五分。遠目にもイイ男である兄の壱哉が一階のロビーに姿を現した。愛を見つけて、にこりと笑う姿は本当に素敵だ。

「待たせたね、愛」

「ううん、大丈夫。こっちこそごめんね、忙しいのに。仕事でしばらく会えなくなりそうだから、先に渡しておこうと思って」

愛はバッグから小さな白い封筒を取り出して、壱哉に渡す。

首を傾げて中身のボタンを取り出した兄は、すぐに笑みを浮かべた。どこかホツとしたような表情だった。だが、すぐに怪訝けげんそうな顔を向ける。

「どうして愛がこれを？」

「昨日、友達の結婚式の会場で、壱兄が二次会をしたお店のオーナーさんに会ったの……奥宮さん？ とにかく、その人から、壱兄に渡してほしいって言われて」

「そう……偶然？」

もう一度首を傾げる兄に、愛は頷いた。

「うん、奥宮さんも友達の結婚式だって言ってた。ちょうど同じくらいに終わったみたいで、口

ビーで声をかけられたの。それ、大事なものでしょ？」

「そうだな、と頷いてボタンを白い封筒に戻す。

「郵送でもよかつたんじゃないかと思うけど……まあいいか」

気を取り直すように髪の毛を掻き上げ、兄が微笑む。いつも優しい笑顔で、カッコイイ。自慢の兄である壱哉を見ると、愛は理想が高すぎ、と言われたことを思い出してしまった。

しかし、それはしょうがない。愛の兄たちは皆、素敵なのだから。

「ありがとう、届けてもらって助かったよ。奥宮さんには、改めて礼を言っておかないと。仕事、今度はどこへ行くんだ？ 仕事とはいえ、いろんなところへ行けてうらやましい」

「そんなことないよ。明後日あさってから北海道に視察旅行。ツアーの下見だから、ご飯たくさん食べなきゃいけないの」

愛は大学卒業後、エールトラベラーズという旅行代理店に入社した。そこで、事務関係の仕事をしているが、たまに営業や、先輩と視察旅行に出かけたりもする。

「ご飯たくさん、か……愛はそんなにたくさん食べられないから、大変だな」

「そうなの……できるだけお腹すかせて頑張らないと……」

愛が小さくため息をつきながらそう言うと、壱哉は微笑んで愛の頭を撫でた。

「気を付けて行っておいで。ボタン、本当にありがとう」

「うん。じゃあ、もう行くね」

玄関まで送ってくれた兄に手を振る。そうして前方を見ると、視線の先に好きだった人がいた。

愛に気付いて会釈をしてきた彼は、すぐ後ろにいる兄に声をかける。
氷川青瑠。

日本アースリーの営業部門の部長で、真面目で穏やかな、大人の男性。
好きだった、と過去形なのは、今でも好きなのだが、どうしても諦めなければならなかったから
だ。さすがに、もうすぐ結婚すると知ってしまった以上、思いを絶つしかない。

失恋した身としては、彼を目の前にとまだ少し辛い。愛は目を伏せて兄の会社を出ると、大
きく息を吐いた。

最近、日が暮れるのが早くて、もう暗くなってきている。足を速めながらふと目についたのは、
ジュエリーショップ。あの日、氷川が彼女と入っていった場所だった。

愛が二人を見たのは、意を決して氷川に告白をしようと、仕事帰りに日本アースリー社の近くま
で来た時。今のように、少しずつ辺りが暗くなってきた時間だった。

目の前を、可愛い人と仲良く歩いている氷川に気付いた愛は、二人が並んでジュエリーショップ
に入っていくのを、ただ見ていた。

後日、壱哉にそれとなく女性連れの氷川を見かけたことを話すと、もうすぐ結婚するという答え
が返ってきて、その日はとても打ちのめされた気分になった。

告白のために奮い立たせた勇気も、好きになった思いも、全部無にしなければならなかった。

「あー、もう、困るなあ」

二人が入っていったジュエリーショップの前で、愛はしきりに瞬きををする。あの日の光景を思い

出して、少しばかり涙腺が緩くなった。

愛には氷川ほど好きになった人は、今まで現れたことがなかった。初めて本気で恋をしたけれど、
叶えることはできなかった。

大きく息を吐くと、息が熱い。鼻の奥がツンとする。

愛の好きな人は、今、最高に幸せだ。好きな人と出会って、結婚するのだから。

もし愛がその間に入ろうとするならば、二人が別れるのを待つか、玉碎覚悟で思いを伝える
か……

どちらにしても不毛だし、そんなことを考えてしまう自分を馬鹿みたいだと思った。

辛くても、諦めるしかない。

絶対に振り向かないとわかっている人を思い続けず、次の恋を探すしかないだろう。しかし、も
ともと恋愛に対して臆病なので、すぐには無理そうだった。

「まだ……次には行けそうにないなあ」

ふう、と息を吐いて前を見ると、ぼろりと涙が零れた。慌てて下を見て、指先で涙を拭う。そし
てもう一度ジュエリーショップに目を移す。すると、その前を通る見知った顔を見つけた。

奥宮だった。

こんな偶然ってあるんだな、と思った。どんなドラマ展開だ、と思えるほど。
頼まれたボタンを壱哉に渡したと、せっかくだから伝えておこうと声を出した。

「奥宮さん！」

名前を呼んで軽く手を挙げると、相手がこちらを見た。その隣には、めっちゃくちゃ美人な、これまたハーフに見える女性。並んだ姿が、とても絵になる。

ああ、やっぱり女性には不自由してないんだ、と思いながら、同時にしまった、と反省する。きつと彼のデートを邪魔してしまった。

けれど奥宮は、愛の思いとは裏腹に王子様スマイルを浮かべて、こちらにやって来てしまった。それを見て、本当にしまった、と思う。隣の彼女はなんだか眉を寄せているように見えた。だから彼が何か言う前に、愛は頭を下げた。

「ごめんなさい！」

「はい？」

「いや、あの、すみません。とんだお邪魔を……」

頭を下げた拍子に、目の縁に溜まっていたらしい涙が頬を伝った。

あ、と思つて手で拭う前に、ふわりと頬に当てられたのは彼のハンカチ。

柔らかい布の感触が優しく、愛はキュッと唇を引き締めた。

「大丈夫です、目にゴミが入っただけなので」

「……そうですか？ それにしては……目が、赤いですが」

泣いた後の目は、赤くなる。ゴミが入っただけというのは、嘘だとわかってしまったのだろう。

「綺麗な方が泣いていると、どうしていいか、わからなくなりませす」

柔らかくて外国人みたいな、口説くような台詞だな、と愛は思った。普通日本人は、綺麗な方が、

なんて言わないだろう。

どんな顔をしているのかと見上げると、困ったように笑う彼がいて、愛はぼかんと瞬きをした。

その困ったような笑顔で、彼が本当に心配しているのがわかった。愛を見ている綺麗な目から、なんだか目が離せなくなる。

「こっちにも涙が……。どうされたんですか？」

反対の目からも零れそうになった涙を、すかさずハンカチで押さえてくれる。

さすが王子様だ、と思った。

ハンカチの使い方が優しい。そう思った時、涙腺が緩むのがなんとなくわかった。

だけど、さっきまで一緒にいたあの人はいいのかな？ と愛は彼女のことを気になった。

でも、それを言えなかった。なぜだか、涙が溢れてきてしまったから。

彼の優しい行為に、次々に涙が溢れ、結局本気で泣いてしまったのだった。

最悪、なんて失態。知人とも言えない、今日で三回会っただけの人の前で泣くなんて。

しかも相手は、綺麗な彼女と一緒にいたのに。

でもよくわからないのは、彼が、付き合っているだろう彼女の目前で、他の女の涙を拭っている

ということ。

少し離れた場所にいる彼女は、黙ってこちらを窺っている。

「あの、本当にもう、大丈夫なので。それに、彼女を待たせては悪いので」
手を前に出して、彼の行為を制する。

「呼び止めて、すみませんでした。彼女、放っておいたらだめです、奥宮さん」

「彼女……？ ああ、そうでした。ちょっと待っていてくださいね、篠原さん」
「え？」

「ああ、ハンカチ、どうぞ」

愛は手を取られ、彼のハンカチを手渡される。

奥宮は綺麗な女性のところへ行った。愛はというと、手にハンカチを握らされてしまったので、帰るに帰れない。

ちらりと窺うと、彼は綺麗な女性に何かを言っている。遠くで途切れて聞こえる二人の会話は、明らかに日本語ではない発音のように聞こえた。でも、ハーフなのだから当たり前か、と納得する。会話を終えた奥宮は、立ち去る彼女の頬にキスをした。やっぱり外国人の血が入っていると違う。そう思っ、愛はさりげなく奥宮から目を逸らす。

「お待たせしました。……どうかしました？」

いいえ、と首を横に振って緑茶色の目を見る。

「すみませんでした。私の用は、本当にすぐ終わるんです。兄に、ボタンを渡しました、って伝え

ようと思っ……。奥宮さんが視界に入ったので、何も考えずに声をかけてしまったんです」

気分が落ち込んでいたこともあり、彼の隣にいる人をまったく見ていなかった。反射的過ぎたな、と反省する。

「そうでしたか。失礼ですが、篠原さん下の名前は？」

「愛です」

「愛さん……可愛い名前ですね」

にこりと王子様スマイルを向けられる。瞬きをすると、よかつたら、と言われた。

「僕の店がすぐそこなんです。この前お話しした、カイリというバーなんですが……もし、この後お時間があるなら、いらつしゃいませんか？」

咄嗟に、明日は仕事だと思った。それに、わざわざ彼女と別れてまで、愛と一緒にしようとする理由がわからない。

この人は意外と軽いのだろうか。

王子様みたいな、優しげでとても誠実そうに見える人なのに。

「彼女がいるのに、どうして私を誘うんですか？」

ほんの少し眉を寄せて聞くと、彼は首を傾げた。

「彼女？」

一瞬考えるような顔をし、すぐに、ああ、と笑顔で頷いた。

「彼女は、仕事仲間というか、友人です」

「え？ 意味がわからない。じゃあ、あの頬にチュウはなんですか？」
「えっと、すみません……単なる挨拶ですが」

外見も外国人なら、中身もそうだったのか。愛は気まずそうに、目を泳がせた。
「彼女も僕も、帰国子女なんです。だから自然と、ああいった挨拶をしてしまって……」

頭を掻きながら苦笑したその顔が、綺麗だけどなんだか可愛い。

緑茶色の目を細める彼を見て、誘いには乗らない方がいい、と思った。

生まれて二十四年。これまで、こういう誘いは何度かあったけれど、乗ったことはなかった。
いや、たった一度だけ、乗ったことがある。日本アースリーに勤める、愛が好きだった人。兄のおまけではあったけど、彼から仕事の後のお疲れ会に誘われたから。

でもそれも、今となつては遠い過去のように思える。

「愛さん？」

「おごり、ですか？」

気が付けば、そう言っていた。上から目線っぽい言い方をしてしまった。でも、予防線を張るにはいい言い方だと思っ。

きっと愛よりも年上の奥宮は、大人の余裕なのか、まったく愛の言葉を気にしていないようだった。

「綺麗な人に、お金は出させませんよ」

そうしてにこりと笑った王子様は、行きましよう、と言つて愛を促した。

笑顔が眩しい。それに、その言い方は優越感を抱かせるものだった。

愛はこんな風に、異性に綺麗だなんて面と向かつて言われたことはない。普通の日本人男性はちよつと知っているだけの女性に対して、言わない言葉。

ついでに行くなんてどういうこと？ 愛は心の中で自問自答を繰り返す。

こういうのって、ちよつとしたナンパのようにも思えるが、彼について行くべく愛の足は動いている。自分らしくない行動を取っているのは、失恋の痛手のせいということにしておきたい。

普段ならついて行かないんだからね、と先を行く奥宮の背中に言う。もちろん聞こえないけれど、彼の後ろを歩きながら、この人と何を話すのだろう、と考える。

そうして歩いて、たった三分程度。

看板も何もない、綺麗なオフィスビルのような場所に辿り着く。こんな場所にバーが？ と思うほど、オシャレで綺麗なビルだった。迷いなく中に入っていく奥宮の後をついて行く。

エレベーターを待つ間に、奥宮はポケットからスマホを取り出した。

「すみません、電話をかけてもいいでしょうか？」

「ど、どうぞ」

「失礼します」

まさか、電話をかけるのに断りを入れられるとは思わなかった愛は、紳士だな、と思いつつ隣でその会話を聞く。

「奥宮です。今、個室は空いていますか？ ……わかった、ではそこを」

短い会話で電話を終わらせて、ちょうどやって来たエレベーターに乗る。

ああ、本当に何をしているんだろう……

そう思つて、愛は隣の奥宮の顔を見上げる。

素敵な王子様スマイル。とにかく眩しい。

絶対この人は、女に不自由していないはず。愛はそう心の中で呟くのだった。

☆ ☆ ☆

好きな物を頼んでいいと言われたけれど、こうした場所が初めての愛には何が何やらわからない。なので、選んでくださいとお願ひした。すると奥宮は慣れた様子で注文を済ませ、細長いグラスに入つた青色のお酒が目の前に置かれる。

「乾杯しましょうか」

奥宮が言つたので、軽くグラスを合わせた。おすおすと一口飲んで、愛は目を瞬かせる。

「美味しい！ 甘い！」

「それはよかつた」

微笑んだ奥宮が飲んでるのは、琥珀色の液体。きつとウイスキーだろう。もちろん愛は、そんな大人の飲み物は飲めないが。

「何か悲しいことがあつたら、飲んで忘れるのも一つの手です」

ああ、泣いていたから連れてきてくれたのか。

心の中でそう思いながら、愛はもう一口お酒を飲む。

「……悲しいことだと、決めつけないでほしいです」

愛が外を向いてそう言うと、微かに笑つた気配を感じる。

「違ふんですか？」

「……違い、ませんけど……人前で泣くなんて。しかも、知り合つて間もない人の前で」

「知らない人の方が、楽じゃないですか？」

顔を上げると、こちらを見つめる優しげな顔。

そうなのかもしれないし、そうでないかもしれない。

けれど、愛は自然に口を開いていた。

なぜかはわからない。ただ、誰かに聞いてほしかったのだと思う。失恋のことは、親しい友人にもまだ話していなかつたから。

「少し前に、失恋したんです。日本アースリー社の、氷川部長に」

「氷川部長……驚きました」

「知つてますか？」

「ええ。営業部門の氷川部長とは、以前、トレジャーホテルの広報と一緒に仕事をしたことがありますから……そうですね、彼に」

奥宮はまだ驚きを隠せないような表情をし、ウイスキーを一口飲んだ。その様子もまた、王子様

外見なので、あざとく見える。

これを素でやっているのなら、相当ズルく、得をすることが多そうだ。女の子はコロツとその気になり、勝手に恋をしてしまえそう。

「……ああ、そういえば、トレジャーホテルのフレンチって、奥宮さんの考えたコンセプトと料理なんでしたっけ？」

気を取り直すように、愛は話題を変えた。

トレジャーホテルというのは、日本アースリー社の傘下にあるホテルだ。

いつだったか、そんな話を兄の壱哉から聞いたことがある。

「彼は、もうすぐ結婚されると」

話を戻され、愛はほんの少し下唇を噛んで答える。

「そうです。彼に告白しようと思った日、私ってば、ラブラブモードでジュエリーショップに入っていく氷川さんと彼女を見たんですよ。ちょうど、さつき奥宮さんと会った場所です。……なんか思い出してしまつて。気付いたら、涙が出ていたんです」

あの時の様子を思い出すと、また涙が出そうになったけれど、どうにか堪える。

奥宮を見ると、目を伏せて何かを考えるような表情をしていた。

「氷川青瑠……彼は名前までカッコイイですね。スラツとしていて、真面目そうで……仕事もできる人だ。……どこか、篠原支社長と似てますね。性格はまったく違うし、顔立ちも篠原支社長の方が整っていてクールですけど」

篠原支社長と似ていると言われ、愛は自分のコンプレックスを刺激された気がして、ムツとする。「どうせ、ブラコンですよ」

友人の美晴からも散々言われている、愛のブラコン。ここまでくると、ブラコンで悪いかと思つてしまう。

「私の兄、三人ともすぐくカッコイイんです。だから、無意識に似てるような人を好きになつてるのかも。それって、ダメなことですか？」

「ダメとは言つてません」

いえいえ、という風に彼は首を横に振る。

「でも、氷川さんが壱兄と似てるって言うから」

「背格好とか、ストイックな雰囲気か似ていると思つただけです。愛さんのタイプなんですわ」にこりと微笑んだ彼の言葉は凶星なので、グツと堪えた。

愛は奥宮の言葉に、彼から視線を逸らす。そうして目の前の青いカクテルをゴクゴクと飲み干した。奥宮は、すぐに新しいカクテルを頼んでくれる。

「失恋は、僕も何度かしたことがあります」

「ウソつきですね」

「嘘はつきません」

そんな綺麗な王子様の外見で何をどう間違つて失恋するの、と愛は唇を尖らせた。

「奥宮さんみたいな人が失恋するなんて、絶対の絶対じゃないですよ」

カクテルのせいでも少し理性が緩くなっているのか、ちよつと子供みたいな言葉を出してしまう。だが、どうせこの一回だけなのでいいかと思つた。

「いや、本当に。一番辛かつたのは大学一年の頃好きだつた、人妻に振られた時です」
人妻、と聞いて顔を上げる。

「愛さんが、氷川部長のことを話してくれたので、僕も一番苦い思い出を」
にこりと笑つて、奥宮が愛を見る。

「知り合つてすぐに好きになつて、人妻だと聞かされても思いは変わりませんでした。不倫と承知で彼女との関係を三ヶ月続けたけれど、結局、彼女は旦那さんを選んで、失恋しました」

不倫なんて、なかなかすごい経験。奥宮のような人だつたら、不倫なんてしなくてもたくさん相手はいそうなのに。

「経験豊富、なんですね」

こんなことくらいしか言えない自分が、ちよつと恥ずかしい。豊富なのかどうなのかもわからないのに。

「こんな経験、なくてもいいと思うけど、いい人生勉強になつたので」

失恋がいい人生勉強と思えるまで、愛はどれだけかかるだろう。

新しいグラスを手を取つて、中身を口に含む。今度は、甘酸っぱい味がした。

酸っぱさで口の中が少し染みる感じがして、大きく息を吸う。

「理想が高すぎる、つて言われるけど……この人だつたら、初めて付き合う私でも、優しい気持ち

ちで寄り添えるだろう、つて思えた人だつたのに」

「初めて？」

パチリと瞬きをした彼に問いかけられて、しまった、と思う。

二十四歳にもなつて、愛は誰とも付き合つたことがなかった。それこそ、友人の美晴から言われるように、理想が高すぎたのかもしれない。さすがにちよつと、自分でも変かな、とは思っている。

「知らないことを言つてしまった、と恥ずかしくなり、変な汗が出てきた。

「そうですか……でも、この人だつたら、と思う人が現れるまで……愛さんは、それでいいと思いますよ」

「え？」

「僕から見ても、篠原支社長はとてもイイ男だと思います。身近にずつと、彼のような人がいたら、理想が高くなるのも当然でしょう。だから、理想は下げない方がいいと思いますよ。僕は、妥協するのが嫌いなので」

『どこかで妥協しないと、誰も来ないよ』

そう言われて、何年経つだろう。学生の時も、社会人になつてからも、ことあるごとに言われた。ようやく理想の人と会えたと思つたのに、その人にはすでに特別な人がいた。

「ある程度の諦めというか、妥協は人生において必要ですよね？」

「そうですね、否定はしません。だけど……僕もそうですが、愛さんがこれから出会つて恋人となる人は、人生のパートナーになる可能性がありますよね？ そういう相手を妥協で選ぶのは、自分

の一生を、その妥協で生きていく、ということになります。だから、恋人にする相手は、妥協しない方がいいでしょう」

にこりと微笑んで、なんだかすごい名言を言われた気がした。なんだか軽そうな人だと思っただけけど、そんなことを思っていた自分が恥ずかしい。

奥宮は柔かい外見と違い、しっかりとした考えを持つ、大人の男だった。

「でも素敵な人って、大体もう他の人のものになってますよね。氷川さんもそうでしたし……」

ああ、なんだかまた涙が出そうだ。

愛は、グラスのお酒を口に運ぶ。まるでやけ酒だ、と思いつつ、ため息をついた。

「きつと奥宮さんも、そうでしょう？」

絶対そうに決まっている。

「僕に興味を持つてくれるんですか？ 光栄です」

奥宮は嬉しそうに笑った。笑うと華やかだな、と愛は瞬きを^{まばた}をする。

いや、そういうわけではないけれど、と内心で首を振りながら彼を見た。

なんとというかこの人は、言うことがいちいち外国人っぽい。普通、光栄です、なんて言わないと思う。

「期待に添えなくて申し訳ないですが、僕はここ一年半ほど、フリーなんですよ」

「ウソつきですね。たとえフリーでも、イケメンには必ず誰かいる、って聞きますけど！」

ガールズトークで、いつも言われること。

イケメンには、ヤルだけの人が絶対にいるのだとか、なんとか。そんなことはゴニョゴニョとしか愛は言えないけれど。

「セフレのことですか？ いたら寂しくないかもかもしれませんが、そういう人は作れない性質なので」

セフレとはつきり言われて、愛はちょっと顔が熱くなる。あんまり使わないワードを言われると、すごく困ってしまう。

そういう愛をどう思っているのかわからないが、彼は苦笑していた。その様子も思わずじつと見してしまうくらい魅力的な人だ。

本当かどうかはわからないけれど、もし事実だとしたら誠実な人なのかもしれない。

そこで、ハツとする。

もしかして、意外と、理想の相手だったり？ 全然、兄の壺哉とは違うタイプだけど。

いやいや、そんな。

会ってまだ三度目の人を、理想と考えるなんてどうかしている。

「初めてD u v e n tで愛さんを見た時、綺麗で可愛い人だなんて思ったんです。篠原支社長の、結婚式の二次会の時です」

緑茶色の目がじつと愛を見るので、愛は落ち着かなくなつて瞬きを^{まばた}をした。

「挨拶したら、日本の名前だつて驚いていたでしょう？ あれが、結構ツボでした。可愛くて」

初めて会った時、そう……この人は奥宮楓、と名乗った。けれど、外見はどう見てもハーフとい

うか、外国人にしか見えないし、透き通った綺麗な目の色をしていたので、名前を聞いて驚いた覚えがある。

「可愛いつて……まるで口説いてるみたい、ですな」

あは、と軽く笑って愛が言うと、奥宮は笑みを浮かべて頷いた。

「はい、口説いてます。だって、これを逃したら、もうあなたと会えないでしょう？ これでも結構、必死ですよ……愛さん」

何度も瞬きをする。

この人本当に外国人だ。日本人なら、面と向かって口説いているなんて、言ったりしない。必死ですなんて、自分をアピールしない。

「友人の結婚式の会場で、再会できてよかった。でも、車の中で必死にいろいろ考えているうちに、あなたの連絡先を聞くどころか、自分の連絡先さえ伝えられなかった。そのことをずっと悔やんでいて。だから今日、あなたから声をかけてもらえて、本当によかった。偶然に感謝します」

そうして浮かべた、王子様スマイル。

そんな口説き文句には、慣れていない。生まれて初めて、愛は男の人に口説かれるということを経験した。

「連絡先を、教えてもらえませんか？ 友達からでいいので、僕と付き合うことを、考えてほしい」

「……まっ、まだ、会って三度目、です」

たった三度目で、こんなに熱い告白を受けるとは思いもしない。きちんと話したのも今回が初めてなのだ。

「もう三度目です。感じたら、動く決めてるので」

彼は、たった三度目と思う愛に対し、もう三度目なのだと言う。この王子様みたいなイケメンは、とてもポジティブらしい。

付き合ってみて、合わなかった時のことを考えないのだろうか。

「で、でも、お互いのこと、何も知らないし。知ったら幻滅するかも。感じたからって、すぐに口説くのは、軽率だと……」

「愛さんは、きつと素直な良い方です。そう感じたから、友達からでもいいので、僕と付き合うことを考えてほしいのですが」

強引なことを優しく微笑んで言う奥宮を見て、愛の頭が混乱してくる。

たとえば、友達期間に、やっぱり君とは付き合えない、と言われたらどうするのか。そんなことになったら、きつと愛の心は傷付くだろう。

勝手に未来を想像して、ダメだと思うが……

「僕では、ダメですか？ 愛さんの理想に、少しも届きませんか？」

そう言って、緑茶色の目が沈んだように少しだけ陰った。途端に、罪悪感が刺激される。

「わ、私、きつと面倒くさいですよ……ブラコンだし」

思わず、自分でブラコンだと宣言してしまった愛は、彼から視線を逸らした。

「それは、あなたが思っているだけかもしれませんよ」

優しい声に、そっと視線を戻した。どれくらい見つめ合っていただろうか。

こんなことが、愛の日常に起こるなんて思わなかった。本当に何気ない、ちよつとした縁を結んだだけの相手なのに、その関係が変化していく。

というか、彼に向かつて心が動き始めるのを感じた。

それでも、バッグの中からスマホを取り出すのを、ちよつとだけ迷ったけれど。

「…連絡先、SNSでもいいですか？」

「ありがとう」

ホツとしたような奥宮の顔は、本当に整っていてカッコイイ。

アドレスを交換しながら、どうしようという思いが込み上げてきた。

画面に表示された「楓」という名前を見て、目の前の奥宮を見る。

これから自分はどうなるのだろうかと思いつつ、ちよつとだけ怖くなる愛だった。

3

上司と二人、仕事の下見で北海道旅行。それも、ただただ食べるだけの旅行だ。

目の前のテーブルには、蟹料理が所狭しとばかりに並んでいる。

「さあ、愛ちゃん。頑張つて食べましょ？」

にこりと笑った上司、神津衣通姫はとても綺麗。背が高く、正統派美人の彼女は、バイタリティのある頼れる上司だ。

「衣通姫さん、この蟹、みんな食べるんですか？」

「当然！ 残したら、もつたいたないじゃない。だって、食べないとこの子たち捨てられちゃうよ？」

「捨てられちゃうのは、可哀そうですね」

「そうですね？ だからほら、愛ちゃんも、どんどん食べちゃつてよ」

そう言つて、お皿の上にこんもりと蟹の山ができる。愛は腕まくりをして、一つ手に取つて足を折った。

「北海道の食べ物屋さん、やっぱり美味しいところは高いですね」

「こんなものでしょ？ 北海道ツアーの目的は、食べることだつてお客様も多いからね」

「そうですね。そういえば衣通姫さん、旦那さんは大丈夫なんですか？ 一週間の間、ご飯とかつてどうしてるんです？」

衣通姫は、結婚してまだ一年くらいの新婚だ。旦那さんは、トレジャーホテルの支配人で神津叡智ちという。繊細な顔立ちのものすごい美形だ。

一週間の出張は結構長い。既婚者の衣通姫が、そんなに長く家を空けても大丈夫なのかな、と思つただけけれど。

「大丈夫。実は彼もアメリカに出張中なの。あつちは二週間帰つてこないのよ。経営者会議みたい

なものだつて」

「あ、それ、吾兄も行ってゐるかもしれませんが。比奈ちゃんが、そんなこと言っていたような」

比奈ちゃんというのは、先日結婚したばかりの吾哉の奥さんで、愛の憧れの女性だ。細くて色の白い、猫のように大きな目をした可愛い人。スラッとしていて、憧れる体形をしている。

「篠原さん、日本アースリーの支社長だもんね。そっか、可愛いあの人は元氣？」

トレジャーホテルは、日本アースリーの傘下にある。その支配人である衣通姫の夫は、吾哉の結婚式にも出席していた。当然、妻である衣通姫も一緒だ。

「元氣です。でも、吾兄つては出張ばかりで……この前はロシアに行っていたし」

「新婚なのに忙しそうね。奥さん、寂しくないのかしら？」

「寂しいみたいです。でもしょうがない、つて思つてゐたい。……比奈ちゃん、吾兄にすごく大切にされてゐるから。ああいうの、いいなあつて思います」

兄の吾哉は妻の比奈を大切にしている。比奈は三番目の兄、健三の幼馴染だ。家が近所ということもあり、吾哉とも昔から顔見知りだった。

いつの間にか付き合うようになっていた二人だが、兄の海外赴任を機に一度別れた。その間に、吾哉は別の女性と結婚したけれど、やはり比奈が忘れられなかったのだろう。すぐに離婚して、その一年半後、比奈と再婚した。

きつとお互いに、お互いしかいなかったのだと思う。本当に好きな相手との結婚は、傍で見ても、とても幸せそうであらやましいくらいだ。

「愛ちゃんには、そういう人いないの？」

「私ですか？ いないですよ！」

咄嗟とつさにそう言うが、王子様みたいな容姿をしたあの人の顔が思い浮かんでしまう。

でも、彼とは付き合っているわけじゃないと、それを打ち消した。

「愛ちゃん、綺麗な顔立ちしてるのにな。さすが篠原さんの妹つていうか……モテるでしょ？」

ふふ、と笑つて蟹を頬張る衣通姫を見て、愛も同じく蟹を食べる。

「ダメなんです、私。ブラコンだから。わかつてるんですけどね、兄たちみたいな人、そうそういないつて」

「みんな顔、整つてるもんねー、愛ちゃんのお兄ちゃんたち。特に吾哉さん、秀逸よね……雰囲気とか、社会的地位と相まって、なかなかないつて感じ？ でも、愛ちゃんの場合は、ブラコンつていうほどじゃないと思うけど？ ただ、ちよつと周りに素敵な人が多いだけよ」

そう言つてもらえろとなんだか気が楽になる。けれど、この美人な衣通姫こそ、素敵な人に入るし、彼女の夫は兄の吾哉と同じくらい容姿が秀逸なのだ。

「衣通姫さんの旦那さんも、すごくカッコイイじゃないですか？」

衣通姫の夫は、上品な大人の雰囲気が本当に素敵な人だと思う。それに、吾哉から聞いた話によると、随分とやり手なホテルマンらしい。

「うーん、そうね。ありがとう。私、美しさで負けるもんね、叡智さんには」

そんなことないと思いつつ、愛は目の前の蟹の足を折った。ぎつしり詰まった身を取り出して、

口に運ぶ。

「それに私、失恋したばかりなんですよ。だから、余計にそういうの無理っていうか」「うっそ?」

「本当です。その人、近々結婚するんですよ。この前、ラブラブな雰囲気でジュエリーショップに入っただけの見ちゃったし」

悲しかったし、すごく落ち込んだ。

せめて好きと伝えればよかった。だけど、やっぱり伝えられなかったようにも思う。

恋には奥手な上に、舌鼓をはじめとする冗談たちを見て育ったから理想も高い。おまけに、愛がないなあと思う人には、大抵、隣に別の誰かがいる。

「そっか……愛ちゃんが好きになるくらいだから、きつとイイ男なんでしょうね?」

凶星を突かれて一瞬言葉に詰まるが、やけくそで笑った。

「そうなんですよ。本当にイケメンで、素敵な人でした。……そういう人が、一人なわけではないですよ?」

一年半フリーだと言った、あの人、奥宮だって本当のところはわからない。あれだけ異国の王子様みたいな外見をしているのだから。

「そんなことないと思うけど。叡智さんだって、三十三歳まで独身だったし。篠原さんだって、一人だったじゃない。だから愛ちゃんにも、絶対イイ人がいると思うんだけどなあ。……誰か紹介できる人いたかなあ……」

「いいですよ、私は」

苦笑する愛に、あつ、と誰かを思い出した様子の衣通姫が、身を乗り出してきた。

「一人だけいたわ! ねえ、愛ちゃん。紹介とか、そういうのはダメ?」

「そういうわけじゃないですけど……あまりあからさまなのは、困ります」

「そっか。愛ちゃん、奥ゆかしいもんね」

ふふ、と笑って衣通姫は蟹を頬張る。大きな口を開けて遠慮なく蟹を頬張ったり、顔をくしゃくしゃにして笑ったり。そんな天真爛漫な衣通姫は、とても魅力的だ。

こういう人ほど、真にモテる女性なんだろうな、と愛はうらやましくなってしまう。

「なら、自然な感じだったらいい?」

「……それなら、はー」

「じゃあ、決まり。さっさと蟹食べちゃおう!」

顔をクシャツとして笑ってそう言う衣通姫を見て、愛は苦笑まじりに頷いた。

いいなあ、衣通姫さん。私も前に進まなきゃ。

同時に、愛はいろんな人と会った方がいいよ、と言った友人の言葉も思い出す。

王子様のような奥宮への連絡は、まだしていない。

というより、何度もスマホの画面を眺めては、ため息をついて終わる日々を過ごしている。恋愛に対しては特に引つ込み思案な性格だから、それも悪いところだ。

自分から連絡なんてできないよ、と心の中で呟くのだった。

出張から帰って来た愛は、実家に北海道土産みやげを持って行った。

就職して一人暮らしを始めた愛だが、さすがに一年以上も経てば一人の生活に慣れてきた。それでも、やっぱり実家に帰るとホッとするなあ、と思いながらその日のうちに自分のマンションへ帰る。

大きく息をついてから、スマホの画面を覗く。

画面に映る楓の文字をじっと見つめて、愛はさらに大きなため息をついた。そのまま画面を閉じると、テーブルの上に置いた。

結局その日も、彼に連絡できないまま終わってしまう。

翌日、仕事をしながら、頭をよぎったのは奥宮の笑顔だ。

連絡先を交換してから、すでに一週間以上が経っている。ちつとも連絡をしてこない愛のことなど、脈がないと思って諦めてしまったかもしれない。

愛はスマホをタップして、画面に表示された楓の文字を見つめた。

無意識のため息をついていると、衣通姫に声をかけられる。

「トレジャーホテルに契約書類を持って行くから、ついて来ない？」

「あ、はい！ 今、用意します」

愛は急いで自分の仕事用のバッグを持って、衣通姫の後ろをついて行く。

「ねえ、愛ちゃん、さりげなく紹介、がいのよね？」

トレジャーホテルは、会社から歩いて二十分くらい。けれど会社の車で行くらしく、衣通姫の手には車のカギがあった。

「えっと……なんのことですか？」

「男の人紹介するって、言ったじゃない」

「そういえば出張中にそんなことを言われたな、と思い出す。」

「あれ、本気だったんですか？」

「もちろんよ。きつと、愛ちゃんの理想に合うような人だと思うから」
にこりと笑った顔は相変わらず綺麗だ。

愛の理想に合うような人、というフレーズからして、理想が高いのが前提のように聞こえる。確かに高いのかもしれないけど、好きになれるかどうかが問題なのではと思う。

それに、男の人を紹介すると言われても、男性と付き合ったことがない愛には、どうしたらいいのかわからない。そもそも付き合い方も知らないのだ。デートもしたことがないのだから。

もちろん、兄と出かけたことなら何回もあるけど、兄と他人はまったく違う。

戸惑う気持ちの中、なぜだかよくわからないが、奥宮の笑顔をまた思い出してしまった。柔らかいような茶色の髪の毛と緑っぽい茶色の目。

話す速度もちよūdよく、外見と同じく低いけれど穏やかな声。

「……いつですか？ それ」

もう一週間経つただから、相手は諦めているはずだ。それに、連絡してこない愛よりも、きちんと電話なりメッセージなりを入れる女性の方がいいはずだ。

奥宮だったら絶対に、そういう相手には不自由しないはず。そう思いながら大きく深呼吸する。

「ん？ 今日、今から。時間帯も狙ったから任せて。すごく自然に会うことができるから」

そう言つて運転席に乗り込む衣通姫を、助手席から見ると

「今つて……仕事中ですけど……いいんですか？」

さすがに今からなんて、心の準備が、と焦る。だが衣通姫は愛の気持ちとは裏腹に、にっこりと笑つた。

「大丈夫、相手も仕事で来てるはずだから」

衣通姫はどこか楽しそうで、軽快に車を走らせた。

いきなり紹介なんてされて、大丈夫だろうか、と思う。それに、仕事で来ている相手と、いったいどうやってコミュニケーションを取れというのか。

「本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫、大丈夫」

そうして彼女の運転する車は、十分弱でトレジャーホテルの地下駐車場に着いた。

衣通姫は書類を手に、行きましょ、とホテルの中に入っていく。

トレジャーホテルの中はとても綺麗だ。いかにも高級ホテルといった雰囲気。けれど、それを強

くアピールしたりせずに、上品で落ち着いた高級感を醸し出している。

衣通姫は躊躇うことなくエレベーターで最上階まで上がり、真っ直ぐ支配人室へ向かった。その後ろをついていく愛は、勝手にいいのかなと、少し不安になる。

「ほ、本当に、大丈夫なんですか？」

心の準備もそうだが、やっぱり奥宮の顔がよぎってしまう。あの人とはなんでもなし、と心の中で呟くが、こんなにも気になるのはなぜなのか。

「ちゃんと、事前にアポは取ってるから。叡智さんも、仕事相手と話をしてるかもしれないけど、入っていいって言つてたし」

支配人室をノックする衣通姫を見る。愛としては、内心ため息だ。

すぐに中からドアが開いて、いつ見ても整った顔立ちの衣通姫の夫が顔を出した。

「契約書類をお持ちしましたけど、今いいですか？」

封筒を見せて、にこりと笑うと、相手も少しだけ笑つた。

「お待ちしておりました、どうぞ」

夫婦でも仕事の時は敬語を使う二人を、いい関係だと思う。愛はそれもうらやましい。

中へ入るように促されて、衣通姫の後ろについて、支配人室に入る。

この部屋の中に、愛を紹介したいという人がいると思うと、なんだか緊張してきた。やっぱりついでになければよかったと後悔した時、衣通姫が意外な人の名前を口にした。

「奥宮さん、久しぶりですね」

耳に入ってきた衣通姫の言葉に、愛はパチリと目を瞬いた。聞いたことのある名前に、え？と思う。

顔を上げて、目の前のソファアに座っている相手を見る。相手もこちらを見て目を瞬かせた。そして、すぐに笑みを浮かべる。

とても綺麗な王子様スマイルだった。

思い浮かべると実際とでは大いに違っていた。現実の彼は、想像より何倍も王子様で綺麗な顔をしている。柔らかそうな髪の毛をしているし、目もキラキラしていた。

「久しぶりですね、衣通姫さん。今日はお仕事ですか？」

「そうなんです、すみませんお話の途中でお邪魔してしまつて」

「いえ、神津支配人から事前に伺つていましたから。それに、そろそろウチの社員旅行についても確認をしたかったので」

そして彼は、ソファアから立ち上がつてこちらに来る。愛は思いのほか彼を見ていたらしく、パチリと視線が合った。けれどその緑茶色の瞳から、少しだけ目を逸らす。

「あ、そうだ。この子、会社の後輩で、篠原愛さん。綺麗な子でしょ？もしかしたらお世話になるかもしれないので」

これから、と言つて衣通姫はにこりと笑う。

愛は、顔が引き攣りそうになるのをどうにか堪えた。こうやって出会うと、なんだか上手く表情が作れない。とりあえず、バッグの中から名刺を取り出し、両手で奥宮に差し出す。

「はじめまして、篠原愛と言います。エールトラベラーズの事務と時々営業をさせていたでいます」

できるだけ笑顔でそう言うと、奥宮は瞬きをして王子様スマイルを引つ込めた。そして、彼も名刺を愛の前に差し出す。

本当は初対面ではないのに、はじめましてと言つたからだろうか。

笑顔が少しだけ違う。

「株式会社海里グループ、代表取締役の奥宮楓です」

それを聞いて、思わず瞬きしてしまつた。

「え、海里グループ、ですか？」

聞き返したのは、海里グループという会社が飲食業界において、有名な会社だからだ。確か株式も上場しているのではなかっただろうか。

「ええ。ご存じですか？」

もちろん知っている。グループが持っている店舗の名前を全て知っているわけではないが、たくさんリサーチした会社だった。

「私が、就職試験落ちたところですよ」

海里グループは国内にカフェやバー、レストランを持っていて、その数は数十店舗に及ぶ。そういえば、この前お酒をおごつてもらつたバーも海里という名前だった。

就職を希望しておきながら、まったく気付かなかつた自分を、バカだと思う。こんなことから、

就職試験に落ちたのだろう。

「そうでしたか。今なら採用しますよ。こんなに美人な方がオフィスにいたら、楽しいですから」
なんとなく軽い口調に、小さく笑うことしかできない。初めて会った体で喋っているのもあるだろうけれど。

だが奥宮は先ほど引つ込めた、王子様スマイルを愛に向ける。

相変わらず口が上手くて、それがとても自然だ。彼は、こういう言葉が自然と出てくるような環境に、育ったのかもしれない。

「お上手、ですね」

少しだけ笑って言うと、衣通姫が横から声を出す。

「奥宮さんって、経営だけじゃなくお店のプロデュースもすごいよ。トレジャーホテルのフレンチも、奥宮さんにお願いで有名になったし。なんだろう、ほっとするっていうか、ゆったりできるっていうか……いい雰囲気ですよね」

「ありがとうございます。僕も、それを目指します」

そう言う奥宮を見た衣通姫は、次に愛を見てにこりと笑う。どうかかな？　と言うように。なんだか目線が愛の反応を窺っている。

そんな彼女に、愛は当たり前障りのない笑みを向けた。だが、彼女のどうかかな？　と聞きたげな表情を思うと、もしかして、と思った。

さりげなく紹介、つてこの人のことなの!?　と、愛はあまりの偶然に頭を抱えなくなる。

もらった名刺を見ると、奥宮楓の文字の下に、外国語で別の名前っぽいのが書かれていた。代表取締役の肩書もあるし、なんと言っても海里グループは業界屈指の会社だ。

兄の壱哉の結婚式の二次会で使われたお店は、奥宮が経営している店の一つ。兄はアースリーという大企業の日本支社長。一流のお店を使うのは当たり前のことだ。

愛は物事の辻褄が合わない、と、上手く理解できない時がある。今、やっと奥宮楓という人が一握りの成功者なのだと完全に理解できた。

兄はすごい人。衣通姫の夫も。その仕事相手である奥宮が、すごい人なのは決まり切ったことだった。

あまりに気軽に、そして普通に話をしてしまった自分反省する。

愛は、まだやっと社会人二年目の、普通のOLだ。

「そんなすごい方とお会いできて、恐縮……です」

営業スマイルでそう言うと、奥宮が緑茶色の目を瞬かせ、少しだけ視線を下げた。

けれど、すぐに微笑んで愛を見る。

「僕は、あなたに会ったことがあるのですが」

「え、そうなの？」

驚いた顔で衣通姫がこちらを向いた。

「ああ、そういうえば篠原支社長の結婚式の二次会は、D u v e n t でしたね。もしかして、そこで篠原さんと会っていたのですか？」

衣通姫の夫である、叡智がそうフォローを入れる。

「そうだ、そこで挨拶あいさつをされた。見るからに外国人のような顔立ちなのに、日本の名前がミスマツチで。」

「そう、だったんですね。すみません……はじめましてのような気がしたんですけど」

あの頃は、まだ好きな人に夢中だった。だから、友人の結婚式場で偶然再会するまで、思い出すこともなかった。奥宮楓、と名前を言われて、ああ、と思ったくらい。

「残念です。綺麗で可愛い方だから、僕は覚えてましたよ」

そうして、思わず見惚れてしまうような魅力的な笑みを浮かべる。

愛はこんな人に、友達からでいいので、付き合うことを考えてほしい、と言われた。連絡先を交換しておきながら、なんのアクションも起こせなかった。できなかった。

もう諦めているだろうと思っていたけれど、目の前の奥宮はそんな感じに見えなかった。

そんな状況ではじめてまして、と言った愛を、奥宮はどう思っただろうか。

「でしたら、海里グループの社員旅行、篠原をツアー担当にするのはどうですか？」

衣通姫がさらりとそう言った。それを聞いた愛は、やったことないよ！ と内心青くなる。

愛の仕事は、主に飛行機や宿の手配といった、事務作業がメインだ。営業はほんの時々、メイン担当のサポート程度でしか経験がない。

「篠原は、仕事が丁寧でしっかりしています。社内にトラベルデスクを設置していただけるというお話なので、まずはパスポートの確認など、事務的なことから始めさせていただきますよ？」

どんどん話を進めていく衣通姫に、愛の焦りが募る。

海里グループの社員旅行なんて、いったいどれくらいプランがあるのだろう。旅行先がバラエティに富んでいたら、一人では処理しきれない可能性がある。

「実は篠原には、まだツアーの担当をさせたことがないんです。こんなことを奥宮社長にお願いするのは恐縮ですが、篠原に勉強させていただけないでしょうか。もちろん、私の方でしっかりフォローしますよ」

「いいですよ。綺麗な方が社のトラベルデスクにいてくれるだけで、男性社員は喜ぶでしょうし」
いとも簡単に返事をした奥宮に、愛は息を呑んだ。

そんな愛を置いてけぼりにして、奥宮と衣通姫の間で話が進んでいく。

「これから四ヶ月かけて、社員のほぼ全員にハワイへ行ってもらう予定なんですけど、年末年始のプランが社員に人気がありましたね。僕は正月に行くことにしたんですけど……では、よろしくお願ひしますね、篠原さん」

そう言っつて、奥宮は今までで一番の王子様スマイルを浮かべた。

よろしくお願ひされてしまった愛は、呆然と目の前の奥宮と衣通姫を見る。

これ以上ない接点を作られてしまった。

自然に、と言った通り、本当に自然な紹介の仕方をされた。

これまで連絡をしなかった愛だけれど、これからは仕事で毎日会うかもしれないと思うと、どうしようという気持ち先が先に立つ。

こういう時、自分の経験のなさが恨めしい。
愛の素敵な兄たちに、負けず劣らず素敵な奥宮。
心の中で泣きたい気分になるくらい困惑するなんて、初めての経験だった。

4

「老兄、奥宮さんってどんな人？」

出張から帰ってきた兄の老哉に、単刀直入にそう聞くと、首を傾げた。

「奥宮さん……って海里グループ取締役の？」

「老兄、奥宮さんが海里グループの取締役って知ってたの？」

「知ってたよ、仕事相手だし」

聞きたいことがあると言って電話をしたら、夕食を食べるに、と誘われた。今日は老哉と妻の比奈との共作らしく、カルボナーラとアランチーニというライスロケ。特に老哉の作ったアランチーニは美味しくて、ついパクパク食べてしまう。

「言つてよ！」

「言わなかったか？ 奥宮さんのところはD u v e n tみたいなレストランより、カフェシヨツプとかバーとかの方が多いんだ。アン・カフェも海里グループだね。レストランはどちらかという

と、プロデュースした店の方が多いんだ。トレジャーホテルのフレンチとか」

「……うっそ、アン・カフェって、海里グループなの？」

本当に、愛は就活で海里グループの何を調べていたのだろう、落ちて当然だ。どんな店が海里グループの傘下なのかきちんと調べていなかったということだ。

アン・カフェはともかジュアルなお店で、まったく重厚感はない。某有名カフェシヨツプと同様に若い人たちが多く、勉強する学生をよく目にする。

海里グループの店舗はどちらかというと大人向け、玄人向けの店ばかりだろうと、勝手に思っていた。が、それは間違いで、どんな年齢層にも対応している店舗を構える会社だったのだ。

アン・カフェはフランス語でカフェという意味。名前が簡単で覚えやすいそのカフェシヨツプは、都内に数十店舗はあるだろう。雑誌とかテレビとかで、シーズンごとによく取り上げられる店だ。

「そうだよ。バーは、海里と……あと、ロックメイプルが有名だね。数店舗あるし。でも海里と違って、かなりカジュアルだ。そういうえば、ロックメイプルは、本人がすごく恥ずかしいネーミング、って言ってたっけ」

老哉が笑って、そう言うのを聞いて、愛は少しだけ口を尖らせた。

「老兄って、たまーに言葉が足りない時がある。奥宮さんと初めて会った時、今くらい丁寧に教えてくれてたらよかったのに」

「気が回らない時だつてあるよ、愛」

苦笑する顔は、自分の兄ながら魅力的だ。